

草津市立矢倉小学校通信 令和3年4月26日 NO.2



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

「お世話」と「お手伝い」…してもら側側の心持ちにかさねてみると

今年は「あいさつ・なかま・まなび」の内の、特に「なかま」について力を入れていこう。そのためにも、「支え合うこと、認め合うこと、高まり合うこと」これを大切にしていこうと言いながら、「わかってないな！」と、子どもたちに気づかせてもらう出来事があった。

それは、1年生が入学したての、とある朝、1年生の教室に上級生がやってきたときのことだ。「困ってる子がいるから、そのお世話をしてあげてくれる？」と言ったとたん、「校長先生、ダメ。お世話じゃないよ、お手伝いだよ！」と注意されたのである。上から目線の、しかも力にものを言わせ、してやっていると云わんばかりのお世話では、ただでさえ不安な学校が、余計に嫌いになってしまうことを指摘してくれたのである。

入学して間もない1年生は、何かにつけて大丈夫かなあと気をもませてくれる。そうかと思うと、「ちゃんとできたよ、エライでしょ。」と調子よく手を振って、安心もさせてくれる。そんな1年生の朝の教室は一層にぎやかだ。戸惑いと立ち往生の子がいるかと思えば、一点を見つめ自分の世界に浸りきっている子もいるし、「聞いて聞いて。」と先生にまわりつく子もいる。実に混沌としている。

そんな1年生の生活も、少しずつ変わってきた。自分の居場所、ふるまい方が、定まってきたからとも言えるし、それ以上に、上級生からの「お世話」では決してない「お手伝い」のおかげでもある。上級生数人が毎日のようにやって来て、1年生がランドセルの中身を机にしまったり、提出物を指定されたところに出したりするのを見守っているのである。当初は、何やら1年生と相談しながら、じっくりつき合っているふうだったが、今では一言二言、言葉をかけるくらいになってきた。ある上級生は、教室の入口で、全体を見渡し、ここぞという子のところに向かい、しばらくするとまた入口のところから全体を見渡しして…、そんな繰り返しをしてから「じゃあね。」と、姿を消すのである。確かに1年生のこうした変わりようは、担任の先生はもちろん教育相談や教務の先生たちのかかわりによるところが大きいのだが、上級生の心遣い、かかわりも相当なものなのである。

分団登校でも上級生の活躍ぶりはたのもしい。どうかすると前向きになれない下級生の思いを聞き取り、子どもなりに勇気づけと励ましで支え、手をつないで校門まで連れてきてくれている。そんな姿に、正直なところ頭が下がる。私などは、つい「何言ってるんだ、ガマンガマン。」「学校ってのはね、行かなきゃならないものなんだ。」などと、言って聞かしてなんとか連れてくるのが精一杯だからである。そんな強引さとは程遠い、相手の思いに寄り添い、時に自分と重ねて相手を受けとめようとする姿勢が、上級生にはちゃんとある。

子どもたちのそれぞれの成長が楽しみだ。

校長 大林道範